

立花 開

奨学生は高校生、大学生から選ばれますが、完成度が高い作品が多く熱意を感じられた。

奥村 俊哉

六月に鏡とじゃんけんして負ける
古書店に秋光いちまいずつめくる
流れ星夜空の傷はすぐ閉じる

鏡の向こうの自分のような「誰か」に負ける、紙ではなく「秋光」を本の魂に触れるかのように愛おしんでくる、夜空を眺め身体の傷はすぐには閉じないことを感じる。自分の身体感覚を通してこの世の触れられない・実在しないものを描いている。

関 朱夏

長生きは望まないからタンポポの／綿毛みたいな性器ください
にせんにじゅういちねんを水飛沫／あげて渡ってくもも
いろのくじら
電車で本を広げるとびびびって／差しこむひかり 戦争をしない

「性を持つ身体」という強烈な違和感を繰り返し詩にしている作者。自身の切り取り方で社会詠への挑戦もしており、幅広い視野を感じる。十代では、肉体と心が癒着していることへの葛藤や、その葛藤を持つ身体から言葉のみを抽出できる恍惚感が原動力になることはままある。その感傷が詩の荒さになりやすいのだが、奥村氏と関氏はうまく昇華させている。

伊藤万由子

貴方が通り雨を凌いだ傘／翌日には捨てたその傘／雪に嵐に／私と共に濡れたんです
君の睫毛に腰掛けて／牡丹の崩れるのを／見ていた／見
ていた

「君の睫毛に腰掛け」というクローズアップした視点と身体に対する柔軟な捉え方、「見ていた」のリフレインから溢れる想い、伝えたいことをあますことなく書き込みながらしつこくくない、完成度の高い作品である。

吉富快斗

人の居ぬ地に風食みの糸芒

実樁の硬さ遺髪の柔らかさ

秋旻に紅引くような星滑る

伊藤氏と吉富氏については、既に自身に馴染む定型を見つけているように感じる。「わたくし」の中にある感傷、「わたくし」が見る詩情を書くのは若さという勢いがあるとき最も発揮できるが、一人の表現者として書くとき、一歩俯瞰することも大切である。（それが難しいのだが）そのぼつんと置かれた「わたくし」の存在の淡さにより一層詩の世界観が際立つ。二人はその俯瞰した目で詩の中に「わたくし」を置いている。安定した技術力と感性に今後も期待したい。

新人賞の総評にも書きましたが、自分の感受性を信じ、守り続けられるのは作者だけです。この一年読ませていただいたどの作品も素晴らしく、可能性に溢れていました。評価をされることは華やかであります。若いうちからの称賛は自分が見えなくなる危険性も孕んでいます。長く続けることほど難しく、価値のあることはありません。皆さまの柔らかい感受性から生まれる作品をこれからも楽しみにしています。